

主題	家族と職員の共通理解・看取りの体制づくり		
副題	今、できることを見つけるために 私たちができること		
ターミナルケア		施設での看取り	
研究期間	4ヵ月	事業所	社会福祉法人 サンフレンズ特別養護老人ホーム 上井草園
発表者：菅原亜由美（すがわらあゆみ）		アドバイザー：関口恵（せきぐちめぐみ）	
共同研究者：			
電 話	03-3394-1094	メール	kamiigusa@3friends.or.jp
FAX	03-3394-9834	URL	http://www.3friends.or.jp

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	特別養護老人ホーム 上井草園は1997年に杉並区の第1号区立特養として開所しました。社会福祉法人サンフレンズの理念「できるだけ自由に・どこまでも対等に・他者への思いを生かし合う」に沿って運営しています。ターミナルケアでは「最期の時を上井草園で迎えたい」という想いを家族の願いと共に受け止め何度も話し合いを重ね、看取り介護の質の向上に努めています。
------------------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

＜取り組み前の状況＞

K様100歳女性。認知症、発話あるが意思疎通は困難。H23.8/12より誤嚥性肺炎の為病院へ入院。病院から上井草園へ戻ることを家族は希望していたが熱発を繰り返し難しい状態であった。経口摂取も嚥下状態が低下し困難であった。一時状態が安定（8/25より点滴も中止し、HPにて看取り対応となる。懸念されていた痰絡みも少なくなった）した。8/31、9/5と2回のムンテラ（園の医師、ご家族、園職員による話し合い）を経て、9月6日看取り対応として帰園。

食事量の制限や身体の負担を考慮し居室対応が続く。その後食事摂取量が少しずつ増加傾向となった。その為もっと召し上がることが出来るのではないか、賑やかな場所を好んでいた氏にとって今の環境が適しているのか職員の中で葛藤が起きた。現在の看取りの体制について家族とともに施設全体で考えることになった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

今までは「嚥下困難のため、看取り対応でHPより退院→ほとんど経口摂取できない→見守るのみの看取り」というケースが多かった。しかし、今回は経口摂取を再開できるまでに回復されたため、家族は「食べさせて欲しい。」職員は「誤嚥性肺炎再発のリスクに対し不安が多い」とケアする中で迷いが多くあった。

氏の状況・状態をふまえて「よりK様らしい看取り対応とは何か」を家族と共にケアに関わる職員全体でカンファレンスを行い考えることで、よりよいターミナルケアを目指す。

目標によって期待される成果として、家族と職員がお互いの気持ちの共通理解ができることで職員の「今のケアでいいのか？」という葛藤が解消されてよりケアに集中でき、氏にとってより本人らしい看取りの体制が作られることを期待した。

《3. 具体的な取り組みの内容》

- ・対象者：K様・K様ご家族（次女）
- ・取り組み内容：家族と職員が共通理解できる話し合いをすること

取り組み経緯：

- ① 9/27 K様ご家族（次女様）・SW・NS・OT・栄養士・CW（常勤、非常勤交えて）でカンファレンスを行った。退院してから一週間、食事摂取良好であったことや氏自身の状態も活気がみられるように変化していた為再度家族の思いを確認し食事、生活の中での楽しみ作りについて話し合いを行った。
- ② 11/11 離床機会について、また今後のケアについてカンファレンスを行い、離床のタイミングや目安を検討した。また今後のケアとしてご家族（次女）との時間を充実できるように散歩やレク、食事などを一緒にできるように支援してゆくことを課題とした。

《4. 取り組みの結果と考察》

家族と共に、職員のケアの中での気持ちの葛藤を理解しあえるような話し合いをすることで、家族より「上井草園に帰ってくることで、自分一人ではなく、職員とみんなで氏の最期を看取ることができるから有り難いと思っている。」「食事量の加減は日頃から氏のことをみている職員の目、感覚に任せる。それによって熱発するようなことがあってもその都度適切な対応をしてもらえればよい」「（職員の経験のために）母を実験台にしてかまわないから」との気持ちが聞けた。

その話し合い後より氏の体調に合わせ食事量の加減をしていく中で、徐々に食事量が増え、10月中旬以降食事の全量摂取が多くなった。その結果体調が安定したため、食堂での歌の会への参加や天気の良い日に家族と外へ散歩に行く機会を持つことが出来た。

結果として「にぎやかな場所にいることが大好き」であった氏にとって、よりK様らしい生活を送る時間を多く持つことができたと考える。

《5. まとめ、結論》

「K様にとっての看取り」について職員が葛藤する中、ご家族の気持ちを聞き、ご家族と施設側の共通理解ができたことでより良いケアの提供が出来た。

氏の逝去後の職員間でのケアの振り返りでは「入院後帰園が難しいといわれていたがなんとか帰園することができた。そういった状態から食事が思っていたより召し上がることはできたことは異例のことだった」「家族を交え、今までに無いカンファレンスが出来た。その際に家族が職員のことを信用して意見を言ってくれてありがたかった」といった意見が出た。

穏やかに過ごして頂けるようにターミナルケアを行っていくことは大切である。その体制づくりのためには家族と共にケアをしていく中での気持ちの葛藤を、ケアに関わる全ての関係者が理解しあえるような話し合いを行う必要がある。そうすることでよりその方らしい看取りの体制をつくる事が出来るのだと感じられた。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究発表を行うにあたり、ご家族に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《8. 提案と発信》

ターミナルケアは職員やご家族の様々な思いや葛藤があるが、その考えや悩みを抱え込むのではなく共通理解していくことでよりご利用者にとってのより良い最期を迎えられるのではと考えられる。ご家族と共にケアをさせて頂く中での気持ちの葛藤を理解しあえるような話し合いをすることを積極的に行って欲しい。

【メモ欄】